

宗門通考第一

特別  
リ 5  
12960  
1



平政物類考中一目録

祇園持合

魁付丸童

二代名

清水卷上付春文左

扇下割合

摺下合裁

清輿摺

次上園打

裁新花

龍打海

妓王

舞台付後寛

舞台

肉毫炎上

小町氏藏書

平家物語書中一



後園精舎のついでに急流の急流のひくま  
らり油屋双樹のまわり文盛者必義れ理を  
つらつすおとまろ人をひきこられたる  
まろれ東のゆめれふと一あけさ共もけぬ  
まろやろひぬひとる小園のあれちりす  
同しとれを矢朝をとふらんも禁の跡高澄  
の王莽梁州周伊唐の祿山らまらしのみか  
主光皇の政うそとらりすあれしをま  
つらつとれをまもひつれをま下れみ

まんもくごころんて民間のうねる所  
をこころりしひさしすてご志  
み一君ともなりちりの見本をうのくゆ子  
平平の門之度乃終女席和此親平治八  
信頼られらそたきさんもおおれりこも  
み子とるましくまらうあつりかまらりくも  
六げくの入るお太政大臣平治信清感ふと  
し人ののりさ備つて人取るさう心も  
も及び建祿そのの足利をたつぬ建し桓茂夫  
皇才又皇子一品式部卿尊皇九代攝政

漢のち正感のまに刑部卿忠感の居れ婿男  
なりうの親王乃清子高親王を友無位り  
てう豊後ひぬうれ清子高望王れとさ始て  
平の姫を新く上総ゆなかり給りたりなら  
まらよ王成をいてく人信よつかなんそ子  
徳也舟將軍義隆のらよを國書とわら多む  
國書より正感小つこふらそ六代を徳國の  
更然たつてつても教上乃他籍をといま  
ゆささまはるの取よ忠感の居りる備ある  
多うり河島相院の清能得長秀院を造る

テシ上ヤニウナ

て三十三回此汚業をたて一予一辨の汚傳  
をす人をもつて汚業を乞兼元皇三月十日  
なり勅賞を賜國を給へり予下さき  
けり切望しつ但馬國のあきとらとら  
給々の上皇かを汚感乃あつりよ肉の孫汝  
をゆるさる忠感世もてけり切望して孫敵と  
ふものう包人乞願る望つことばりと回子  
十一月廿三日五條とらりあつり皇の御書  
忠感を願えうらみきんとう後きく事  
不忠感あの中をばりへ受てり建忠知乃力

みあつりも我舅れ氣よじ下れくつり忠感れ  
もらよめしじこと氣れたあ方のくあひう  
うらよしきんすう取者を金して忠は  
事つりふがふあつりことつり用きをつり  
と氣曲のあつりあつりさやまきを用き  
忠業帯れ志こよ志ときかけよとら忠人か  
のくよえのくにじのけりてやうしあ  
をゆふおてひんよむふあてられらうけり  
このよえらとを忠なとれやうらうみく  
幾人読人目ときまうとらり又忠感の事

とや一門多うく本之助平兵衛の孫とんれ  
三郎大丈丸房の子は左兵衛尉政知とつふ  
ものりり源助れうと云ぬの志のよ前黄城  
乃腹をき<sup>し</sup>伝あくろけあうたちわんし  
さんて返上れ小巻子畏てそゆらる費首<sup>ツツ</sup>以  
下あやしみをなしてうけ不極うりうり終  
代經の巻は布衣のまわく依をなにとのそ  
頼<sup>頼</sup>籍<sup>籍</sup>なりとうく<sup>く</sup>所出よと六位をもちて  
しとせられらるるをれを家父畏て申けるを  
お侍の主備おちるぬと教やもうらよきられ

始まうくつこく<sup>く</sup>願てそのながんやうを見  
ししておとそゆなわとさうかまううう  
とて畏てそゆまらるるをうくなくとや  
忠とれらんを世の圖討なうりまらる忠感又  
ゆありのしおふまれけるにんを拍子をか  
く伊勢頼子をすう災なりまらるるそをや  
さ進けらるるあまらるるけなくけん  
を拍<sup>拍</sup>魚<sup>魚</sup>天皇代治事とぞ申けり中治を都れ  
恒君もうやしく<sup>く</sup>是地下に跡をあらまひ  
かつて伊勢國に恒國始うりまらるるこれ

くたのうけしものおことよきて伊勢平氏  
とうらやき建りしそへ出威乃目れす  
まれらまたるゆへふようかやうまをわ  
き建たるなれ忠感何とまふやうをなく  
して浮遊もいゆるをさうさうなれまひらう  
小治おを死出られくともは震没れ治後ま  
してのくるる敵上人のみられけるあまそ  
主没罪なりしそへた人さくまらまける  
力をあつけまふてうりてられけりあま待  
うけをさそやいのくははらると甲けきそ

ともいし下かううおもつ建たれとも  
のひけらばとなしそやうて敵上をそもま  
里のからんするあれつゝあまわあまそ  
圓初乃ことなりとう言られける五條まを  
白濁指しきん志乃のそ甚あきの華巴うい  
らるゆての髪なとさゆくか指よおも  
ろま事とれまらうういひゆまれくま中  
らる太宰権帥季仲つとりふ人ありまりあ  
まらま交乃らるうけまきしみる人あくう  
つやそ甲まらうれ人いまそ幾人馳あつら

時清おれ也くみふりれりるよんを拍子を  
つめてあふくろく思ふ點の明りのなる  
人乃う新くゆりまきんとくもやまきけり又  
花山院おれ太政大臣忠雅（新）といふる十歳とし  
時父中一ゆき忠家つよをくまぬきみなり  
子まへにれもきしを故中一清門衛中一納言  
亂成つともさるいまの播磨もまておれ  
あはれの筆に取てまぬやうおもてなまきけ  
れもあれも又あまじうまゆまぬもくく  
ひく乃ちの人のまをみくつあそまや

とまきけるよふまをりやうまあつるも  
事つくあを末代いめつらむすんあが  
けのなりとそんくやめまきる業いあや  
見ふ糸もてりし教上人一回り（新）  
とまきけるうれ雄鉦を新くおま（新）列志  
兵杖を新くま中をか入るるをみふこま（新）  
式の礼をさる編命ありある先親なりあの  
子を忠盛納信成をお侍の兩邊と号して布  
衣のけしものを故上れ小巻よりをまき  
る勝代刀をたてたんさつて節書（新）れ産子け



らなる支條希代申る要さる子孫傳承なりと志し  
際小筆墨せり花料むかひ明くともやを敬上  
の汚札を刊て剛友傳信まゝ新へまゝしつて誌  
録一回しつた人尸さまじきこと上皇おんさ  
小矯り後ぬて忠感なりしき汚為りし陸志  
申すまじきことを之際増小意に禮儀の由金銀  
受付仕らぬ他を日人ともあひまゝまはやく子  
細りまゝの因縁来り故人事をつゝんて守り  
よ懐てまゝの死証たるをせんらたれよ忠感よ  
そとくまますしそひらうらよ系傳承れ来らうら

及しさるる況事やもそとら有るくを故力  
をのこます人さの次よ刃れ事へ主証解よ  
わつげ並は鞆のくかきまじりかなめ奏言か  
付てとのめさうまじりや中をそのの義を  
後るよしとて情明くかをさ出て鞆境あふ  
みうをを鞆書れをろうやうらの中ら  
木刀は銀箔をそをくらとけら高産れ死守  
をれりまんのたれよ明くかを鞆すら由縁  
すといふとも故日れ新詔を存して木刀を  
帯志け不用きのほとらう神妙なれり勢よ

たつさうらんぼく乃若れさうとことむを  
のうさうあつふかきれこひてさ又麻呂  
小庭に程依のうと出る身土の席おれ習せ  
忠感のやうおさあつすとて還而之いん  
よ新志うぬさあつて花柳のさうをたうり  
スニキ  
きつさうの子ととをみふ程依入りおつて  
舞波きしるぬ上のあつて人をさうおふ  
及びすあるとさ忠感備お困らり都への不  
つらとさう入り身程院におへつて時石  
のうさいりおと保も進もたうさう

あつるの取もあつしこのうさう  
波さうのつとさうとみく

と甲さ進らうけ進もあつたなうそは忠感  
もそやうてあのを今新集う入られけ  
流忠感又仙洞に忠感の女房をもつて  
つ進らうらあつとさうとさうおひ  
女房のけお祢る川まお母つてさうあふ  
まをとらますれて出られさうおれと  
るれ女さうたちあさやのをさうれ月靴  
うやうとあつたさうなうとさうひあ

まされしは女さう

志井らるるもりまらるる月なれし

切なりあまそいもさうなれし

とらえらるるいさしやとあさうさう思

まれりる徳摩も忠度の母なれなりを

おとやの風情も忠感れそつこりけき

まらぬ女さうも縁なりなりて忠感刑

部もなつて仁平三ま正月十日と一五

十八まさう段路のや清盛婿男さうお信

てうれつや清盛保えま七月さう治

乃左赤を流さる給ひ一河安藤さうさう治

まて忠感あつさうさう播磨もさう遷て同三年

太宰大貳なる次お平治元年十二月信

頼義朝の孫教乃内も信方まて賊法さうり

たつさきさうさうさうんさう一まあさうす

忠賞さうさうさうさう次のとさう正三

位。叙さうれうらけくさ家お東お替換れ

遠使の別當中一細さう大納言さう上てお義

おれ位にさうさう左右をさうさう内大臣さ

り太政大臣様一位さうありさう大納言さう

ゆきと長杖をぬて際方をゆくも特車輦  
輦の聲ををりうやうなりなりなりなり  
か入るひるはれぬれ居のこころと右政大臣  
を一人小舟籠して四海は儀刑なり園をお  
あめを誅誅し際際をやりきおさるる  
人にあつてもをすふらりあふといふりし  
れも別國官ともなはれたるその人なる  
てをけりす、あつてふ友なれとも入さお園一  
と四海を蒙れ中よりきらきらし上るるゆ  
よ及びす、折平丸かやう舟懸昌するまを

徳野権現は清洲生ともを夢みるのゆへを  
清風ゆるる安藤もたつとと伊勢園阿野津  
より舟より徳野へあつてまらるるちきなり  
麴乃少のへをこころ入らまけるを先達やあ  
れをこころをりてとと清くとりぬ系るア  
と甲けきこ入さお園ととと十戒をぬもつ  
て徳を徳新れきなれともる園或王の舟に  
ころう白魚をとり入たれ車として調味して  
より力くひる子席おともりこころをさらる  
そのゆへもや下向の核打ほくして若事れ

みねほろりともろり者太政大臣よいつて  
子孫の友も誇のともよのなるよりあかき  
すまやうふり九代れえ（註）をうしめふこそ  
カゴ  
ヤシたきま（註）ひくして清感仁安之途十一月十  
一日とく又十一日とく痛まゆのさき存命の  
たのよだちまらよお家入るをも法名を治海  
とびろつあぬ人それゆへみや着病たり取  
すいつてて天會を金（註）をぬれくらし（註）英雄  
を程けふすとそえくしをよそ人れ思ひ  
川ふをふ事へあらぬれ國ちなうさげもり

ことばをみのあまひをいふまうことばもあ  
り後れま本をなひつてふ同くはげし没り  
一糸のきんころとくたひひてつら（註）花（註）  
も英雄もたきまをなうへおめを向ふ  
あなり入きお團のうらや平大納言時忠  
錦代意ひまらるをあの一門よあうあうそあ  
を皆人物人ころるうらや意ひけらさきま  
いのなる人そそのゆつふおひまがこまん  
とろくたろ忍ほくろくあやうまりけし地  
てあえはつまやううらやあふのまんよいつ

ふらそ何事も六はくやうとふたひびて  
しつを一そ曰海人乞をゆたふりのなり  
賢王覺主れ法まつるまや<sup>持政</sup>笑白乃法成  
縁をもつたあふさき<sup>法</sup>老なとれ人の  
さうぬ取よりり合てふうとなふう<sup>王</sup>  
中事へ帯れ習なまきととあめ<sup>の</sup>禪門を所るる  
の禮を<sup>神</sup>ゆらう勢よ中ものな<sup>を</sup>故を入  
るお國乃禪<sup>十</sup>四五六乃童<sup>三</sup>百人をろ  
るて<sup>後</sup>をりふろよまきり海り<sup>あり</sup>さひこ  
これをさきき<sup>り</sup>けりるる<sup>中</sup>

よみりくして<sup>地</sup>のけり<sup>の</sup>けり<sup>平</sup>  
の法事<sup>を</sup>あ<sup>し</sup>海<sup>中</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>一</sup>  
つこさぬ<sup>け</sup>り<sup>り</sup>も<sup>ま</sup>館<sup>ス</sup>  
り<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>家<sup>に</sup>入<sup>し</sup>質<sup>財</sup>雜<sup>具</sup>を<sup>返</sup>捕<sup>志</sup>  
うれ<sup>や</sup>法<sup>を</sup>り<sup>り</sup>取<sup>て</sup>六<sup>と</sup>へ<sup>井</sup>  
目<sup>み</sup>み<sup>ん</sup>よ<sup>さ</sup>る<sup>や</sup>り<sup>も</sup>調<sup>あ</sup>  
て<sup>甲</sup>もの<sup>な</sup>り<sup>り</sup>の<sup>り</sup>ふ<sup>ろ</sup>と<sup>た</sup>  
て<sup>し</sup>り<sup>り</sup>を<sup>ま</sup>き<sup>り</sup>る<sup>り</sup>馬<sup>車</sup>  
り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>禁<sup>門</sup>を<sup>か</sup>入<sup>す</sup>り<sup>り</sup>  
ら<sup>り</sup>り<sup>り</sup>に<sup>及</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>

てそしびとみこつてつり力に業花死さそ  
ひるれとから一門ともて整昌して婿男  
全盛同大臣左大臣次男宗盛中一卿之太  
将三男宗盛三位中将婿孫繼盛四位中将  
とて一門此二十人教上人世能人法  
國の更<sup>シテ</sup>領<sup>リ</sup>法<sup>ヲ</sup>目<sup>ニ</sup>部<sup>ト</sup>台<sup>ト</sup>六十餘人なり世に  
を又人なくろみくられけらびり素良侍  
門の侍と云神<sup>ニ</sup>意<sup>キ</sup>不<sup>レ</sup>逢<sup>ル</sup>朝<sup>カ</sup>亂<sup>ル</sup>中<sup>ニ</sup>東<sup>ノ</sup>大<sup>將</sup>を  
始<sup>メ</sup>と<sup>シ</sup>て大<sup>日</sup>田<sup>守</sup>小<sup>中</sup>一<sup>儀</sup>を<sup>述</sup>承<sup>ト</sup>改<sup>ス</sup>  
れりる皇<sup>ノ</sup>の<sup>記</sup>に<sup>見</sup>才<sup>左</sup>大臣<sup>小</sup>の<sup>ひ</sup>な<sup>る</sup>母

あやむつり小三少ヶ彦なり又徳を皇の侍  
とさそ左大臣房大臣左大臣大將なり一親<sup>親</sup>親  
大臣之太<sup>大</sup>將<sup>二</sup>連<sup>を</sup>宗<sup>院</sup>左<sup>大臣</sup>之<sup>親</sup>の<sup>侍</sup>  
子なり<sup>宗</sup>衛<sup>院</sup>此<sup>侍</sup>なり<sup>左</sup>小<sup>親</sup>親<sup>小</sup>野<sup>之</sup>  
殿なり<sup>師</sup>輔<sup>九</sup>条<sup>殿</sup>仁<sup>之</sup>此<sup>侍</sup>なり<sup>右</sup>左  
宗<sup>院</sup>乃<sup>侍</sup>阿<sup>之</sup>左<sup>之</sup>教<sup>師</sup>毎<sup>大</sup>二<sup>條</sup>汝<sup>之</sup>宗  
堀<sup>川</sup>汝<sup>侍</sup>雲<sup>白</sup>の<sup>侍</sup>子<sup>なり</sup>二<sup>宗</sup>院<sup>の</sup>侍<sup>なり</sup>  
子<sup>なり</sup>左<sup>之</sup>琴<sup>房</sup>重<sup>殿</sup>なり<sup>兼</sup>美<sup>月</sup>攝<sup>法</sup>性<sup>寺</sup>  
汝<sup>の</sup>侍<sup>子</sup>なり<sup>二</sup>連<sup>小</sup>親<sup>親</sup>此<sup>侍</sup>乃<sup>侍</sup>子<sup>息</sup>  
能<sup>人</sup>身<sup>者</sup>て<sup>る</sup>ろ<sup>の</sup>物<sup>なり</sup>汝<sup>上</sup>れ<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>

坂と云ふはつ道しし人の子孫をて禁を繼  
繼をゆる綴綴録と云ふまとい大信大将  
小なつて兄曾左丸よりあひおらふこと未  
代と云ひひなううやうまならういふとくも  
なりその外清じと云へんおらうまみふとら  
とらよはしといひ給へる一人は播所中納言  
重剛乃おおまてたりするうつとらといふ  
れとき清物末らうらまを平治のみよき  
後ひふらうらうらまを花山院の左  
大信没の清登盤取らうらまをさんだら

あまうまうしくたり 採あのを重剛を播所と  
ちけらうらまをててひすま終る人よ  
てつひのやう一野山をあひけく町は播をう  
るまうらお屋をたてくすま終らうらまを  
てれらうらまといふらう人これとくまらうら  
らうらまを播をたてて七箇日お屋を名跡を  
朽くこと昭太神よりこれらうらまをたれを  
らや三七日お屋を終波らうらまをててて  
らうらまをゆきし神も神徳をのくやうらま  
もあうらまありけきとて女日のよまひをぬも



ちきり一人を養ふたぐさぬふ皇子清徳生  
りて繁太子おちらるる井は清のさぬひ  
のて院考りう母を終て建礼門院とらう  
まら入道お国の清むすあならう人ま下  
國母をてましまさしとりう甲は及それ  
一人を六条掾政政此水政取にならるさぬふ  
高倉院此清在位此清母は母代とて瀬三倉  
乃盤名をううやり白河政とておも三人小  
てをまうくくたる一人を豊賢と政此水政  
取りたるあぬふ一人を七条院清理大夫

信隆のよめひくく終つる一人を冷泉大納  
言隆房の此水又安藝國教嶋の肉竹の後  
小一人おらうけりや恒白河法皇へ下りて  
ぬきひふ子女清此やうてをまうくくけり  
う此水九條院此清は為盤の殿一人あま  
を花山院此上臈女とらうて廟の清方とら  
中らる日本秋津嶋を且清のよ十六ヶ國  
平家おたり國三十ヶ國既よ中團にあし  
らうとをほの老園回島くくとり小教を志  
らん終屋急満して盡上る暇のこく  
新録

群集して門前をなると揚州の金刑列の理  
兵部乃のや蜀道乃の一七珠系新ひと川  
としてりあつらふ事なり知雲舞園八墓並  
吟爵馬れもてあうし酒打うらくを帯脚も  
二タキキヤ  
仙洞もあれよやまをさくともそみえもひり  
らまいつらにいつこふまて源平あ氏新説り  
わくはつらもれて王位ふたさこのりすをのほ  
りく物控を極すらるものよを新いま  
免をくもアアくをみられをなうつら  
り保えよる義子くま治よ新朝新さくれ

てのらやまの徳氏とも成なりさき成先  
つまじつらや平亂の一敷れを新昌く  
らなうくつこをものなうつらなうんす  
れ代つても何事のあうびくうみくし  
まらと馬羽佐浮野智の後を共草うらほ  
天花冠刑園友備任つひふをこなす  
海内もくつらなうを問えいする新  
統中一永慶應保乃くうらりくはる遊習  
者をく因うりほいまくあうりうられ  
志のくやをくぬんうらまいるくあらぬ

上下たろれを致くしそやきいんもなり  
深淵より澄て濁状を切じり同主上と  
父子れ清めひこよなにかしつる清をこ  
あふかかれとも思ひのうのこも  
松ほろりたりこ運も世潔き及て人  
をえとふゆへなり主上院の原を清め  
中つ包さ敷ましくり中へ人  
地とろりしをもつてちさる  
中つありきり如新院の香大皇太  
ししを大炊清口太大臣の清じとめ

かりて事をもくまきなり  
乃外を清け魚の清なり  
けらおの舌の清なり  
さ海より清くし  
を清くし女二三も  
清くしとも  
かなり  
ま  
ひ  
志

あるてはあーりーをりしすまじむす  
こやがよあーりりて吾等入内りふくや  
志大信取よ益者然くこさるあのみ事を下よ  
をひてことなり勝申なれしこつ愈後らり  
たりをのく矣見知つふは先與知れ先難  
とふらふよ震と乃則之銘吾を度人太宗の  
まさりた高き皇帝れ継母なりと大高宗の  
高宗の各母たちあふあやありさきを夫の  
の先親さるうへ幼後のうやなり我朝よを  
神武天皇よりらののびこバ十二代よをより

のそいふまじ二代れ吾よたきそ流ふ海をこ  
のすしと流つ一回子甲さきさる上皇も流る  
るつるさるうーあーらへ甲さき流くとも  
まじ原なりけりあそ子小父母なりつ建十  
善戒戒現よあつて美宗の懸位をあもつ是  
ほとのあやかしくの懸位よまりの勢さるつあ  
とこしやうて流内内の日益下きしれり上  
さちらりら及もせ終りす大さやわくとこ  
さのいふまじさるうり流たみさよしつあ  
しーますとん帝小をくまじさるうー久秀の

結ふけし地同く野原の露ともさきも花をも  
おそはれもけつせいのまじしつたつてぬうふ  
みくをさしきりさうまうさう浮かけさつり  
ける文れねしつらくちさきあはれを  
よはさしつしさをなまつて物人モノとすまのみ  
さしつ改セウは招會セウとくさつてつひる細コを中ナカに承  
なしたくすまわつみまうさめくまがわあ  
皇子浮延ウツノ生まるるも國母クニノとすしきる老  
も外ソトとあふりる色イロを瑞ミツおるてもわい境  
こ通トウひくく老をたもあつてすす浮書ウツは

れつてつたならうさしつてつてつてつて  
中ナカさきつらくとも浮延ウツノ事コトもたつてつてつてつて  
そのころあつたになつて浮延ウツノなつてつてつて  
うさつてつてつてつてつてつてつてつて  
さふたつたしなつてつてつてつてつてつて  
せよさつてつてつてつてつてつてつてつて  
よやさつてつてつてつてつてつてつてつて  
さつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
とつてつてつてつてつてつてつてつてつて

う天流が立なれととそつのもをなるとさうさう  
よ敷少もあらもふのこしよなりてりら流車  
子多すけれをられぬひたり流入内内恒を  
難新汝すーそましく来るひこすー新政を  
すく災中ささせぬく流う海なるうの忠震敬  
乃昭君もを覺聖人隣子な多てくれらと伴  
平鄭汝倫虞世南太公望角割志生割勳母馬  
新長足長馬新れーやうー蜀八割割軍の  
安城さなううううさうさやうーさわりを  
流当小野を周の七也野望の志やうーしと

のけらもこつりとううんく志坊流源汝勳家  
の流たやうーこもをる金景の書多うーき山  
れき鳴の月とありとつやおぼのゆる切ま  
ろてまーくけさうれつも何となき流を  
まさこり乃流つてにうさくもうのさ變ぬ  
たうーがあまーれうよすあーゆ序のまぬ  
を流ら舞しやえ帝のびーもや流あひた  
う抄りーのさまきん

思ひまやうさ者あうーすーゆくうまを  
たなり雲井の月をみんとさ

ろの関の清なり〜ひひ心くす初めは  
や〜<sup>ガク</sup>此清ことなる<sup>カク</sup>を禮子<sup>カク</sup>永美元臣の春  
此ころより主上清不親の清〜<sup>カク</sup>まこと  
き給〜か友の始うもなり〜をま〜<sup>カク</sup>外  
よにもらあぬふ〜さお給て大藏右補伊紀  
兼盛のむすめ<sup>カク</sup>淑子と上〜乃又此二歳は  
な〜をぬふのま〜くけらな太子おたて  
ま〜さあ給<sup>カク</sup>しと〜ふ〜ほとよ<sup>カク</sup>後に  
親王<sup>カク</sup>此名下を給や〜くま<sup>カク</sup>免<sup>カク</sup>禱あつ  
あつあつ下何となうあり〜るさ備なり

きつととき<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>爵<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>人<sup>カク</sup>〜甲<sup>カク</sup>あ<sup>カク</sup>れ<sup>カク</sup>け<sup>カク</sup>ら<sup>カク</sup>を  
是<sup>カク</sup>本<sup>カク</sup>朝<sup>カク</sup>に<sup>カク</sup>勳<sup>カク</sup>勲<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>物<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>た<sup>カク</sup>つ<sup>カク</sup>ぬ<sup>カク</sup>り<sup>カク</sup>は<sup>カク</sup>清<sup>カク</sup>和<sup>カク</sup>と<sup>カク</sup>皇<sup>カク</sup>  
九歳より〜又徳天皇の清ゆけり<sup>カク</sup>頭<sup>カク</sup>う<sup>カク</sup>け<sup>カク</sup>さ  
き給<sup>カク</sup>あれ<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>周<sup>カク</sup>公<sup>カク</sup>然<sup>カク</sup>成<sup>カク</sup>王<sup>カク</sup>は<sup>カク</sup>お<sup>カク</sup>も<sup>カク</sup>り<sup>カク</sup>〜  
日百<sup>カク</sup>積<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>功<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>お<sup>カク</sup>さ<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>清<sup>カク</sup>ひ<sup>カク</sup>〜お<sup>カク</sup>う<sup>カク</sup>〜  
外<sup>カク</sup>禮<sup>カク</sup>忠<sup>カク</sup>仁<sup>カク</sup>乙<sup>カク</sup>幼<sup>カク</sup>主<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>扶<sup>カク</sup>持<sup>カク</sup>し<sup>カク</sup>ぬ<sup>カク</sup>つ<sup>カク</sup>〜  
擧<sup>カク</sup>政<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>妃<sup>カク</sup>なり<sup>カク</sup>鳥<sup>カク</sup>羽<sup>カク</sup>佐<sup>カク</sup>五<sup>カク</sup>歳<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>侍<sup>カク</sup>從<sup>カク</sup>三<sup>カク</sup>歳<sup>カク</sup>より  
踐<sup>カク</sup>祚<sup>カク</sup>あり<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>頭<sup>カク</sup>う<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>か<sup>カク</sup>ら<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>し<sup>カク</sup>に  
是<sup>カク</sup>も<sup>カク</sup>二<sup>カク</sup>歳<sup>カク</sup>は<sup>カク</sup>な<sup>カク</sup>ら<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>ぬ<sup>カク</sup>ふ<sup>カク</sup>是<sup>カク</sup>御<sup>カク</sup>な<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>もの<sup>カク</sup>〜  
〜と〜を<sup>カク</sup>ろ<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>な<sup>カク</sup>り<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>る<sup>カク</sup>ほ<sup>カク</sup>〜<sup>カク</sup>は<sup>カク</sup>同<sup>カク</sup>七<sup>カク</sup>月<sup>カク</sup>廿

七日上皇はのちホリキヤ清なりぬ清とて女三は  
かめむむのちまうのこし玉のまこれ録  
の帳れうらみみ清なみさみじをさせおり  
ますやうくうれねホリキヤ香陰ホリキヤとれうしとて蓮卷  
野乃ちく再長山よねさめまふホリキヤ清藤ホリキヤ送れ東  
真福寺延暦寺の大命ホリキヤ都打捕とつふ事と志  
いこうてまうひホリキヤ小振ホリキヤ籾ホリキヤをふふ一を八君  
ホリキヤ能清ホリキヤなつて後清ホリキヤ曇雨へわしをんとまの  
ゆはを南ホリキヤ如二京乃大命ホリキヤ慈徳ホリキヤをしつ清曇雨  
の地くつホリキヤまふらのもく此教をうけことあり

きつとまうホリキヤ聖武天皇乃清なるまふて  
なまねし東大寺此教をうけ次りホリキヤ澁海二  
の清なるて真福寺乃教をうけ小京よを真  
福寺小ひのるて延暦寺のりくをうけ次り  
て武天皇乃清なる都待和為智徳大師乃ホリキヤ茶ホリキヤ割  
とてホリキヤ園城ホリキヤ寺のりくをうけゆるを山門乃大  
念のりホリキヤ智心ホリキヤらんホリキヤ芝野ホリキヤを背て東大寺乃此  
真福寺乃うへよ延暦寺乃教にうけゆる南都  
の大命とやさまうかうやホリキヤ瑠ホリキヤと念後と  
ふ取くこくに真福寺の西金雲ホリキヤ院ホリキヤ親善房勢也



房とてしあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親  
畜坊とてあしとる大無僧二人ありとる親

門のくまに安んずる後をあらわす  
まてともみふうきへくまの文よそそあつた  
よあめあうとうのあさまーさた序のまを  
いんまも肝醜をうーなひて空へそれ  
おす回女九日た午刻もろと山門の太  
ひこくしう下海すと空しーくも  
遊使商船系もむむくもせさ者進とも押  
破て能へと又何もれくPおしーくも  
やらん一皮山門の太高も保て平亂討を  
らるうしとさあしーくも軍兵曲裏も弟

て言ふれ陣頭を警固と申成れ一敷うれ六  
けへ廻りあつまる一辰もつうれ六とへ  
汚筆なる清盛なるの阿をいさる大細きた大  
将までたしけつちさよたうまじつちの  
またり小松波なあくあつてたつていふさ  
ことうへえとしつ先中さまじつちとむけ  
ものともさうれつくさる事おひく志  
さまじつちの太鼓とけつてさよまじつち  
すうろなる清水もふさよまじつち佛國僧坊  
一さものこらとみふやまじつちらふられさ

めら汚筆送の長人書替のうらをさよめん  
かたあとうまじつちし清水もや真福寺れ未  
まじつちよあつてなり清水もやあつてけ  
あつたや親善大境愛成池をのうとれ  
書て大門れあみさつてけまじつち日又  
不忠後ちりう及つすとせつちさつちを打  
たつてけつち山流るりのけつちまじつち一辰も  
いうまじつちうら還汚なる感つちつちま  
ま汚筆もまままじつちつちつちまじつち  
於用心のたつちつちつちまじつちつち

くろりくろりのるられらうけまをて父大納言  
きんやそそて一院の法考ううおがまにたお  
うま切がゆまうのてまおたほあううう原う  
おくひののあれしうううううああうらあ  
うれうもうらときぬふまうとれうまうを  
ま越のうままきたるをまのこしゆあしく法  
調うもいしううううううううううううう  
うがみ中うこわううううううううううう  
法考てもうくく穀慮チヤリふうむの法考うて  
人のうううううううううううううううう

うう神の三藝が法考のふううううううう  
てま法考のうううううううううううう  
うま越のうまゆうううううううううう  
とうううもまひまう一院法考の法考あに  
ううううううを習考をたうた法考うう中  
にうううう不思強の事ううううううう  
うう考を切ううううううううううう  
一院中のまらうううううううううう  
うううううう法考うううううううう  
てううううううううううううううう

正平家もつて此外より過分よの圖を此清い  
ましめりやとう申ける人々此の事やう  
なり磯も耳なりおうろくくもそをのく  
さうやふめしれりるさるほくもそのと  
や諒園シヤウエンなりこれる清徳大嘗會シヤウエイもたかなし  
れと建春門院もときをいまる東井清あ  
甲けるも清腹小一ぬんれやのましく  
おと太子もたてゆりさせぬふしとき  
あししほとま回十二月廿四日御も親王  
の意名りうゆりさぬふあこれる改元カインも

仁安と号し同月八日去ま親王も意名  
りうふらる終ひ皇子東三条も春新ハルニジも  
たぐき清表を清徳キヨトク父と歳王上を清徳三  
歳い清徳も治目チメもあひ叶りす他寛和二年  
す一糸院七歳も清徳位なり三條院十  
一歳も東宮もたぐきたまふ先海なご  
しものも主上を二歳も清徳ゆりを  
さきあひりつうふあゆりし二月十  
九日清くわをすつて新院と申す  
款ひまの清え服もなくして太上天皇の

そあり澄<sup>カ</sup>菟<sup>カ</sup>弁<sup>カ</sup>始<sup>カ</sup>あれや始<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>し仁<sup>カ</sup>安<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>自<sup>カ</sup>  
三月廿日新帝大極政<sup>カ</sup>りして清<sup>カ</sup>祇<sup>カ</sup>位<sup>カ</sup>ありい  
三<sup>カ</sup>見<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>わ<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>  
平<sup>カ</sup>菟<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>榮<sup>カ</sup>花<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>母<sup>カ</sup>建<sup>カ</sup>基<sup>カ</sup>門<sup>カ</sup>位<sup>カ</sup>と  
甲<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>菟<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>門<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>皇<sup>カ</sup>  
わ<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>團<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>榮<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>位<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>清<sup>カ</sup>  
姦<sup>カ</sup>なり<sup>カ</sup>又<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>細<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>甲<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>院<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>は  
せ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>進<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>肉<sup>カ</sup>外<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>清<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>て  
も<sup>カ</sup>執<sup>カ</sup>権<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>信<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>そ<sup>カ</sup>見<sup>カ</sup>え<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ろ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ろ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>叙<sup>カ</sup>位<sup>カ</sup>隆<sup>カ</sup>  
目<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>甲<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>忠<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>なり

き<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>揚<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>妃<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>揚<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>忠<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>  
う<sup>カ</sup>ア<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>ほ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>免<sup>カ</sup>  
て<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>ろ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>團<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ひ  
あ<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>進<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>笑<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>甲<sup>カ</sup>も  
流<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>團<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>夫<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>孝<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>り  
流<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>包<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>皇<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>  
れ<sup>カ</sup>嶮<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>見<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>志<sup>カ</sup>  
流<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>皇<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>法<sup>カ</sup>都<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>家<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>拍<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>  
乃<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>身<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>皇<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>と  
い<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>—<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>じ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>

に婦は妓王をこ入さお國<sup>テウ</sup>新<sup>イ</sup>屯<sup>イ</sup>きくま<sup>イ</sup>たり  
きよよつて妹の妓女をも世の人もてなると  
あやふれあなうす母とらうこよもい<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>く  
つてとらうを毎月百石の費をくくま<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>れ  
と<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>富<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>こと<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>め<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>る  
先<sup>イ</sup>から<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>探<sup>イ</sup>我<sup>イ</sup>知<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>志<sup>イ</sup>乃<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>  
つ<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>事<sup>イ</sup>へ<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>し<sup>イ</sup>身<sup>イ</sup>相<sup>イ</sup>佐<sup>イ</sup>れ<sup>イ</sup>法<sup>イ</sup>字<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>志<sup>イ</sup>中<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>  
きん<sup>イ</sup>さ<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>お<sup>イ</sup>こ<sup>イ</sup>通<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>二人<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>舞<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>し  
たる<sup>イ</sup>け<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>なり<sup>イ</sup>始<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>於<sup>イ</sup>于<sup>イ</sup>小<sup>イ</sup>立<sup>イ</sup>之<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>白<sup>イ</sup>靴<sup>イ</sup>き  
を<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>つ<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>け<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>男<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>そ<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>終<sup>イ</sup>と

つる<sup>イ</sup>中<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ろ<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>ほ<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>乃<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>  
て<sup>イ</sup>水<sup>イ</sup>子<sup>イ</sup>つ<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>用<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>さ<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>白<sup>イ</sup>拍<sup>イ</sup>子<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>  
名<sup>イ</sup>付<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>京<sup>イ</sup>中<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>妓<sup>イ</sup>王<sup>イ</sup>  
う<sup>イ</sup>さい<sup>イ</sup>ち<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>れ<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>費<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>や  
む<sup>イ</sup>者<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>そ<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>じ<sup>イ</sup>もの<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>わ<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>を  
ま<sup>イ</sup>ご<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>あ<sup>イ</sup>わ<sup>イ</sup>れ<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>妓<sup>イ</sup>王<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>幸<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>あ  
同<sup>イ</sup>遊<sup>イ</sup>女<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>み<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>あ<sup>イ</sup>れ<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>て  
う<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>わ<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>た<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>さ<sup>イ</sup>海<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>妓<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>ふ  
も<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>子<sup>イ</sup>付<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ん<sup>イ</sup>い  
は<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>わ<sup>イ</sup>る<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>ほ<sup>イ</sup>お<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>み<sup>イ</sup>ん<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>我<sup>イ</sup>妓<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>ふ

妓二といふ或妓福妓徳なるといふものなる  
たりそ祿じ者を何祿ふよるもいふ  
へんやそたかくおむのし下まはさそ  
かまといはけのぬ老もたほるるり  
三とせと申お部す又白拍子の上は一人  
いささうまか實國の老なりおをを講とう  
中けるとう十ととうまししむり  
おが其の志いひやうともあつる  
まのら舞をいふる見すとて京中の上下も  
ておをことなめからいおは何時佛行お

けらるる下すいさういれとも南時  
さうもあてだうさうるさあはるハ条汝  
へめさあぬさうかいかけまぬさひを  
かきひなふらうさういおへえ推系してみ  
ひいてある何ぬい系教つる系りさる人系  
て南何部さうあしは佛はあう系てゆや中  
まれし入さ何祿さやうのあうひそのを人  
れつよさうつてさうゆりれあう  
推系さうやうやあふそのうへ神ともい  
佛ともいる妓さうのさうむ承つて叶ふ

とうくおがよとうきひけろ佛語おすけ  
なふいこれをして既よいてんしけるを女  
王入き汲よりきるやわうひ光のまいさん  
まつひのなうひまてしうさふらんをう  
としもいまおたいけうさぬかんなうた  
海た下おもひたうてきりてさふらふをそ  
けなう保られて返さ勝勢もん事しう果  
便なれりりちるさしうしうかこはしう  
くもさぬらんうたてししみるな  
れし人うるもさあがさもたといまひを

汚境ししういをふらしうさぬかんなう  
たくと色汚對面もろのまをたしうらう  
さふらふつふたう理をまのきてりしう  
き給もくありのくれ汚なきをそさふ  
羅りんすしうもやけ進し入るりてくわ  
あせうあふつこよん事なれし見事して也  
さきとて汚所のひをめてしめされきり佛  
はあをすけなうしう進をそさふいん  
とくららりのさぬらんり集ら入さやう  
て出布ひ表面もそさふ乃見集やあま



うらとほしきともぬまのかりにとねりやら舞  
わまらにスーヤすくじる團々んさむじを  
きんさんするほしてまいつくろい急とも  
まうくあふくまのえいつくやうひとけうた  
うしとせこまも佛浄あぬりさぬくや  
ていつくやうむとほろうたふくろるを始  
てころるぢりちす代とるぬへし姫小松浄あ  
りのあなる急き小病うむきぬてあふ  
くれとせくせくく三るんうひまう  
たうとれしきんらんらんともみふ耳目を

はわらうのす入きもたりのけい思ひぢく  
わきましいらやうさよまのわりをさあめ  
きてる舞もゆきやうより流らん一苗みも  
やはくこうらめあとして免きまきりうき  
て一らんすひらとたり佛浄あを媛深うら  
けい免てみあのらよにまきまきとく  
やうもよまなわけまきながくも舞もらん  
まへま心も及びすふひままうけまき入る  
お國まひふめて佛うらんをうらまき  
仏浄きんこまきまきやなふらやほぬらう

やめりゆりゆりも推系れものまじり  
さきよのきつをゆへに娘女王法おのPおまの  
ていこうちりつるさきよもさぬらんおやう  
よゆへにそのまなを娘女王法おの智ひ法らん  
ふれうらもつりうゆるしやしくいせ  
海ぬるつりう法おのまきとPおれを入さ  
まつりも法あつるまけに娘女王のあふをさく  
けつその義なうを娘女王をさうかあめと監  
つし佛法おうれ又つりてさるるま待ふ  
るさるるもよのけりわんたにさるる

うへゆりゆるまに娘女王法らんゆへにま  
つりきつりまつり一人のをくれなもい  
とくあつるゆうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ままゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
甲斐ゆ入さゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
うゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

らばあたふまはよのくしくんゆかたのいままふ圓と  
まのこひちりひろくせ見るとさしきそのま  
とく走くくつて出つてみかよとさしきまのけ  
ま<sup>五</sup>樹林のあよもやもよりのひ田かなれを  
ひすふんたまのれさつさしきまのけひろくの  
しましてあめのと務らめひさすきをたれ  
志願なれさるこりもたしつろくくさくの  
ひなななみこそこほ建けるあくとしもあれ  
るえことなるねとあつうとさしき出ける  
ゆくと認めまはみくまとわ思ひけん後

子うかなく一首のあつさつさき出ける  
もといほくもかおくも同<sup>一</sup>野道ののくさ  
いつれうつさしきあしてさつさか  
さる車に乗して番帳へかつる童子のうらよ  
ふきおたくなくよりおれことうなき母  
や妹ら<sup>三</sup>をみくらのつみおと<sup>一</sup>もあひあ  
ま<sup>三</sup>もあまこのつら返事とさ及りすさ  
いら女よたつねてそつさあやらりとささ  
つてらるさつほとよ毎月をくられける直  
る百貫をもちくえられてつらを佛法あめ

ゆりつれごのときを始てぬりひさうへ  
らの京中一れ上下あめうへつてくまて  
まことや妓王はあうへ海に糸波よりいし  
海ぬてつくらなまじい思案してあうも  
しして我をふれ流のつす人もあり我を使  
者をぬけらものえあう妓王さねもとてと  
あう又人おたゆんしてあうひまもふ子  
ぬきよもわうぬし文をとらぬれく申な  
あうして流のひ母あひらふまてもたうり  
まうとて通は流きてさうぬし思ていと海

よれもそとつみたるひくてことゆられ  
ぬあうを春のころ入道お園妓王のりい  
は君をたてていふおやまのら何らあうま  
のまらふおのい建くまにんあるは業て  
と格ともうたひ森なとをまひてほとあ  
なくああうとそ意ひたる妓王とらうの流  
也春の色乃まふたみるこくへんてやに  
まうと入るまてなと妓王さ世事をもさぬ  
そまうらふハ一をさそのやうをやを洋海も  
まうらふおひのありとらまひける母とらま

とまへくすゝのふいふとてつりつたろししとて  
なほくまなくくひうらんしちみまつり  
小娘王清おなと清返事をお申さぬうが極  
よ志のしきあきんよりつむいぬを女王  
清もさへ入て暮しじと思ふみらなくをこ  
そをのしりまらふともたさぬあしむお  
ゆへよ清返事返するしともあかえはよの  
度史さんおまつりしきあきんしゆいぬありと  
作らぬくを部の外へつひとあつひのあつひと  
をのれち清めさぬしゆいぬとよさしゆいぬ

ししたしひ部を出さるともたきをいふか  
しあつひと清返事返するしともあかえはよの  
とまのりかつひと清返事返するしともあかえはよの  
て二夜おめておひくしゆいぬとよさしゆいぬ  
清返事返するしともあかえはよの  
志けるわいのよも女王清返事返するしともあかえはよの  
よはまんぼしきあきんしゆいぬとよさしゆいぬ  
しゆいぬとよさしゆいぬとよさしゆいぬ  
のえん着せしゆいぬとよさしゆいぬ  
清返事返するしともあかえはよの

もありありとふとふとを思ふともなりける  
まはらふもむりよははるかなるものを  
男女のなごひなりしんやわらわをよめ  
三途のあひひい思ふれよつをぬきしを  
天清なをきしころさふらんあめ度り  
まふつねをいふ命なうかなをぬきま  
あふもあらしんやあれ外つうがさきん  
らんだとひもあをあふまともわこきを  
まらうつけいといふなごん若本れは  
海ももきくさんこやとりの人しは

まらうつけいといふなごん若本れは  
てなごんぬひなめはるうのひては  
もつさしきれあつを部の中へては  
つてさあふれそら生後生乃親子は  
まらうつけいといふなごん若本れは  
志みらなれを親の命は育しとつまみ  
ちよおもむりてなくくおたちけり  
中へさうきんたれひとらまいらん  
まらうつけいといふなごん若本れは  
又白拍子二人おして  
白人ひとば車よとら



思ひたれどなりぬくおみこをくさへはく  
と様一そうたふさる佛をむ叩くや元文也  
我もほのむを佛なりといひまも佛性をも  
お方知るこほるれもさうつりたれとお  
ななく二返うこふらうけまじうの咄し  
いさうをなをぬ給く子平亂一門のこつ教  
上人法大丈侍おつこ致まをみお感懐をそ  
おのまきけり入さもとふみといへる神妙  
もも早らものりぬけを誂もさくまれ  
ともたふをまきけりこものりてはつこは

後やめいもともつゆはあつていつたやうを  
ゆいひ誂をもまふて佛なくさあさう  
まひけら妓王とつうの侍也事よ色及びす  
たみる誂をさるておにまらうと思ひし  
るなれとも親の命をうじのしとつらさ  
道おほもむして二度うまを免て見けら事の  
むうさうつておのをさあるなうも又も  
うま免誂みんすもんじをたか力をかかん  
と思ふかたもつゆも妹乃妓女をまき  
て婦男をたけお我ともふみをなまきしと



りよ母とらそは夢におなりとてなく  
又教判をけあやりのお娘をいふおとやうの  
ことあふしとてさすしとてけうん  
てあふまけらるやれうううとてあまこと  
よわあせのううじらもしつりなわ他はこ  
婆こななきを妹れお女とみをなきんと云  
二人のじものともよをくれなんらちと  
おひげやあへうら母つれちつてかみの  
なきんがまじしれもともよをかをおんと  
思ひのいゆる死節も来らぬ親しみをかけ

さきんすうや又運冠をそあつしをらん  
けさをうらまれやもとなり死てもうらても  
かになくとなく母よの産ころうあつ後  
うけまらしてこそあうめ後生てんた無道  
くたのじらんするものつさしとてあめ  
とあつてあつていふとあつてあつてあつて  
よふふとてあつてあつてあつてあつて  
うま死をみけるまのうらちとてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

そ又もうそつ先をまんをらんをらんをらんをらんをらんを  
わへいそんとして娘を母一とて尻ふなり暖  
い念佛してそわらうけつ妹乃娘女あを  
みくわの子方を明けてつ連もとそよふか新お  
らんとうつ整りしうまうておをいやもん  
また建つるおをといふへえとて十九うてさ備  
張つる婦と一雨ふおさうとわて娘を娘お  
そのし連なる母らそをみるうらまじも  
めともそに格をうふおをのわいよとて丸  
おとろへら母白髪を修きてもなおのを  
ひして四十五までつをそし二人のひも  
めもろともお一向書はる念佛してひよ  
娘を娘そ歌ひつろつて春をまたきぬ結  
乃らつ風吹ぬ建をほしわひらうらなをたの  
先づく何まの戸もつるのちれ紫に思ふ事  
ひくころなれやけふ日のりあれり一の山  
乃端にのころと娘みるも日のりしに路ふ水  
そあお津ふまでまなりはけの我うもし  
こへひさねくものをかもそそとさんす

そ又もうそつ先をまんをらんをらんをらんをらんをらんを  
わへいそんとして娘を母一とて尻ふなり暖  
い念佛してそわらうけつ妹乃娘女あを  
みくわの子方を明けてつ連もとそよふか新お  
らんとうつ整りしうまうておをいやもん  
また建つるおをといふへえとて十九うてさ備  
張つる婦と一雨ふおさうとわて娘を娘お  
そのし連なる母らそをみるうらまじも  
めともそに格をうふおをのわいよとて丸  
おとろへら母白髪を修きてもなおのを  
ひして四十五までつをそし二人のひも  
めもろともお一向書はる念佛してひよ  
娘を娘そ歌ひつろつて春をまたきぬ結  
乃らつ風吹ぬ建をほしわひらうらなをたの  
先づく何まの戸もつるのちれ紫に思ふ事  
ひくころなれやけふ日のりあれり一の山  
乃端にのころと娘みるも日のりしに路ふ水  
そあお津ふまでまなりはけの我うもし  
こへひさねくものをかもそそとさんす

ひと町らよけきてもすまよししき町一里  
 ひほくきてたくつたきぬそのきたきさ  
 たらうのまむそきまぬまし竹のあそと紙と  
 らぬさしき焼かすうよさたてく親子三人  
 念佛しやぬらぬみ竹乃あそと紙ほか  
 とくうらたくもものかまらまのとも尻  
 とも町をけりあつ連こ連やうひかな  
 目わくの念佛してぬらぬをさまこせん  
 て海えん乃さくらまてうきらんむらぶ  
 人もとひこぬ山墨れ志し乃いぼらどのうら

がまきし敷もあてたまつたつわへきわけの  
 此竹乃あそ戸なれしあきすとをきし屋小  
 らんことやまのうさし中こいしあきく  
 ひねんとねのふならうまよなさいけをのき  
 すして管さうしなふ相ならし逢来たのそ  
 幸ふ縁肥のむねをけりく信してひさなく  
 の名号頭ともんまらしあうをうつねてむ  
 つゆぬふならん至念れ来遊よてまらまをを  
 かなりの引掃たのまらまあひのうらま念佛  
 ばとらうのふなとぬしひよ心をいまりぬ

て折のめこと流のきをぬりて驚取まてを  
うらとまり淋山おそ出きこふ妓王の建をい  
つみほとけ流おとみ春ふをゆめつやうつ  
流のやうひきれをかつけ流おたみるこく  
えんてうやうのあや中をこおやあていら  
うさふらくとも中あをさ又思ひをくわ者  
ともなわぬへけきをけい絶らまて中や  
めとらりまうこく振集れまのうくむと建  
たつをゆるひを妓王流おれ中きよよん  
てうらうりぬと建ていぬふは母のお

のつふのひなふ事いまの力をらよまの勢  
まてをことくめられ集りき事むく  
うらゆるひのわらせのわと建路をみ  
し！はあてまいつの又まのかれう人と  
たぼくてうれとをあうよお色つす後子  
ス！又の建の秋よあしてこつと分とが  
まさふ路一舞乃のゆけよのにおかをゆ  
うやいけうや又あてま集りきをいつとやう  
うらひ路ひしつを思ひきと建てうら  
ひしうれ後を流ゆくをないゆくとま

つまのつゝきとらけらうかやうよ一ぬゝ  
 敵るのらさあまうようやま〜つ  
 子をいへるしゝも入るぬあ〜ははりら  
 おま〜あさすはく〜物を棄すら小安<sup>おん</sup>  
 け菜花をゆめのまたれ〜ひありの〜  
 うきん人方やうけか〜見佛<sup>みぶつ</sup>をまて  
 しの度<sup>おん</sup>はま志つみなも多生<sup>たじやう</sup>をいへ  
 へんともうのひあらんま〜の〜  
 志〜の〜玉<sup>たま</sup>新<sup>あたら</sup>たのむ〜あ〜  
 お不<sup>おん</sup>是れうのひなりおあ〜のりるをも

待るつらひのあろふ稲妻うらもなほも  
 たり一たんのたれ〜ひにがこけて後生を  
 志〜と〜せ〜とれ〜と〜と〜  
 か〜の〜なりて〜と〜と〜と〜  
 ころまのをうらのま〜をみま〜  
 かわてを出来〜のや〜は〜  
 事りこれも目〜の科<sup>か</sup>を〜ゆ新〜  
 子〜と〜と〜ま〜と〜も〜  
 心〜は〜た〜た〜と〜と〜  
 ゆのまを〜と〜と〜い〜と〜も〜

のつねん松の音ひびくろもきたま  
やうにれら乃わくじうさら念佛して姓生  
の象徴をときじと袖をうかふを何て  
あめくといふいとふれも妓まなま  
をくさへて且こきれあまほくま智ひだち  
ぬひけちとを養ふことすうふ世乃中  
の境がまをさのうとこそねりつゝか  
にともすれやわふされ申すうらり  
て姓生乃そとをいをとせんあやのなふ  
たとともあかきと生ともは生をまふま

井小志うんたの致むらりありけりか  
橋よさゆをうりておろたまは日ころこれ  
を落ちりほとものこらぬつてを姓生う  
うひな一あのだひうとといはときんう  
何うも又う襟たれまらちの尾よなわ  
ししたたはつりやえ申のやうよん  
もつひ物も志ひうとわこされ出ぬよ  
うもれをうりぬもころうさりきりさ  
まともうまをさけうらみくさゆをうか  
を常れなうひまを根もたけなけえ

なすしとてをまじつうふ十七よりうなる人の  
こと進ぼしは穢は<sup>ト</sup>汗しやひ降ふを歌りんと  
母の思ひ入ぬふうまことの心を心と  
を抄がももききうきしうまげら善念識りか  
ひさきろともも歌しんとて四人一雨くこ  
もありぬて初夕佛お小花香をうなる御念な  
を歌ひけきききききききききききききき  
ともみみ<sup>生</sup>のそをまをさきりうさ  
あししうれも故白河法皇の長梅<sup>カ</sup>書りる  
を帳しとてめま<sup>女</sup>佛とららりる言身と四人

テシガ

一雨は入られりるありりりりりりりりりり  
なりぬるあやこもあき元後七月十六日一院  
法皇あり法が歌れくちと美楳の政を志  
ろしとてきききききききききききききき  
院中よりちううりりりりりりりりりりりり  
上人上下の水面よりこかかか友位<sup>侍</sup>祿<sup>歩</sup>み  
ふちよあふらつるまなはらとてききききき  
かきひまてなをききききききききききき  
れうあたるをを團まあななんろの人れが  
ろひたらしうれ友よをなわらんたとて

うぬららるらりあひくさうやまかたり  
一校も肉と作なりけりおびり代々  
乃てうてをたひくさうのおぼくとい  
ていさしやうりやうれあやなりと盛秀つ  
将門をうらね幾の魁徳宗仁をやろけり  
流るる平流平をせりあ多うりも勅賞おこ  
おくれしことと御堂銀子を過さうり天清感  
をひくあくろ入ましくふもろまふあやう  
ゆるらら子あまもさす忠に成て王法のは  
きぬりゆへかろと作なりきれともけりて

かきけり清いまりめなり平流も又おして  
約家をうりみをおふあやもたひり子おめ  
そてまうあけり根本をさしし忠二季十  
月十六日小松原の次男新之位中将資盛  
そのときあいまご新あちとて生ます十三小  
なりまきりうり雪やまごきよ降らるるをうり  
野のけしさまことにはもけりうりけり  
まのれはとと世評らるるうりて  
野や忠野忠馬場舟うりいてく野とも  
まごまごあうりひりる上区立く終日



おのりまゝに流す及てふはへにそゆ  
られなれうれとては務録を垂教するま  
まにきりり東洞院の流すに流す東洞院  
新へまにて東洞院の南へ大炊流門を西へ  
流すなる質感の居大炊流門猪熊をて改下  
の流すよとぬつたよ事ありあふ流すは人々  
なるものそ務録なり流すはなるなり  
物よりたつとてくといらなれとてあ  
まのまがころりい見えよとともささわけ  
おのりまゝに流すに流すよとともささわけ

女よりうりのみ事ともなきや礼儀骨法わ  
たまるものなり改下の流すともいし  
と一切下馬の礼儀も及しとたくり事破  
てとぬらんとする間々ささきらへ流すや  
川や大改入きれ録ともいす又かきき  
たきとささきとて質感朝臣を始と  
して流すをささきとて流すを頗死奪ふ  
及きり質感朝臣もふくはりへたも  
て流すはあ國祿門よいけり新しき事  
も入き大よりの流すたひ改下なりとも

洛海のわらに身をほろぼふ一か子にたふさ  
者にさうなう死辱はあつてさう進まらう  
進根の足事なれどもさうさうして人子を  
あさひの影くそ山本にたもひさうをな  
てさるるうあはれあけ進りのまきしに没  
下紙うらこ暮らそやも思ふやいりおと意  
つし主感郷中さ進けるをさ進さう  
ううういま一損ぬ光基モトなと申源氏とも  
に何さびつ進ていもんやまこと一門の  
ち志よくたても信る一主感の子ともとし

ゆりんよるるあはれ没れ没出ス一義りあひ  
て家物くらおりいもぬ事うらやうひらう  
よるうとてしも町中よあふらう物とも皆ら  
よきて自とら後もなんらうあくく心ぬ  
アアあやまつて没下る盡礼の由と申さう  
やあお色いもてさうのさ進まれをのら  
入さ小松没もあうともさひをあしませ  
してあつたわなうれさあひとも乃きさう  
てあつたうのうて入るの原うと外を又たう  
ろ一さ事なうとたしよ老とを新の漸るを

一のやして部合六十餘人ありて来て  
 女一日主上は元服は清きとて其のうらよ取  
 下清出のふりなりい清くもてもまらう  
 赤なりおと清清方ともうましくまらうて  
 質盛うららすくけとてうまひはれ共とて  
 叩くまは取て死が教下をふゆありて  
 志ろしつとこれ主上の清きんあく清が  
 冠縁なる清而も其のたれよ清並<sup>キヨナヒ</sup>危よとてし  
 らく清産あるるまうとて子の清かまらう  
 清くろも世終るとて度と待<sup>マシ</sup>門より入清き

つまらうて中一清門を西へ清出なり総總掃  
 川の邊より去けりれ共ともひこ甲三百餘  
 騎まらうけなり攻下清中よとてまらう  
 いをておとけり一清ふとてさとて清  
 ろりけりおと清清方とてそのまらうをまらう  
 志やうそのまらうをまらうこよ清のまらう  
 追いの馬より取て引おとておとよ清<sup>シヨク</sup>標志  
 て一こに清もやとてまらうといとて十人  
 のうらよの清生<sup>キヨ</sup>基のもととてまらうをまらう  
 てたりその中よ清<sup>シヨク</sup>人<sup>シヨク</sup>清のりこまらう

をまらんとてやられき海の前とく里と思ふ  
るうすまのまともとにそふるとい  
ひぬをやう切てけるを後を汚るるまの  
うらへもゆこのますけふい進なとして鑑  
つふまつとせしし汚牛のしりうひ物ひ  
まらんとぬらうくおこりし志ちらうてうら  
あひたやまはくくまともへううまひけ  
れ入る神妙なりとそぬるまひたの汚車う  
るまや因幡の勢使身相に困久丸といふお  
のこ下鴨なれともさうくくまそのまを

やうくみらうらひ汚車汚るまうて中  
汚門に汚取へ還汚なりまふ末節の汚神よ  
て汚たみさともく人けく是汚の儀式あさ  
まらま中くまらうなり大織冠汚海云  
乃汚事へあましく中み及びす忠仁に昭意云  
らまののく掃取笑白れくは汚目小あ  
らせぬふことしやるぬりをよつすあまこらう  
平亂の悪りれけし免なれ小妻殿たまひ  
あもつてうのたまひあむらふくまふら  
ひともゆらうせしてみか劫南まらふまらひ



ひものつりつるを羅うくおほくつらとてきん  
入さお國の浮じも先女浮よきくさあぬふ  
浮とく十五歳は皇浮狩子の養なりその法  
母高院太政大臣大將を稱し中を愛給  
本ありきり時子徳大寺の大御を美さつ  
を仁よわひあつる浮又花山院の中御を並  
雅つも所望らりそ外故中一清門藤中御言  
亂成錦丸三男新大御言成親つもむく小中  
さうその大御をそわんれはきくさうつらと  
けきと揚く乃つれは皇始らるまらハ幡小

る人の僧をこめて億禱の大願を七日に  
あきらめられらるる菟中<sup>カウ</sup>甲良大御神の浮  
おなる揚の本へ男山はつらり山鳩之苑  
来てくひあひてそ苑おけら場をい揚大業  
菟丸才一乃使老なりまきよのふゆ志を  
なすとして阿乃きんけう<sup>キウ</sup>匡清法中けり一因  
憲へそく言ん志こつられとて進たつこと  
にわつるを清白<sup>ウラ</sup>あふるとして神祇友よりて  
清うらありおもさ浮浮くしみとうらふ  
ひ甲を但きをさそ乃浮ほく志みふあつるを

唇下へはく志こころもくろく大おあんろき  
にむらきをもひんききとむるや人目乃志  
けらきしむれしく<sup>ホ</sup>安行ろく中津門島丸新  
大納言の巻取らる聖賢の上のやしろへ七  
敷取らきて系られきり満する敷着取小下  
向しそくそくしたるまところそくまけ  
かきり安代れのとれやしろへ系りころと  
おわしそく津巻没の法戸をひくきゆ  
志うきりあなら津こきりそ

さいくくくくくくもれけけけけけけけけ

ちかきをきききききききききききき

新大納言ききよかきをわろれをもつこききす  
のものこの社れ津巻敷の津巻なる松乃  
洞子<sup>ボ</sup>種をめてくろひり一聖賢あめて<sup>ボ</sup>徳  
君乃法を百日おあゆませられきるま中  
に後ろくくくくもくくくのけりおひた  
しうなりてほたすききおちのくく雷<sup>ライ</sup>火を  
きよてま中ききききききききききき  
まんとくもくく一聖賢あれをうらきつさ  
ろりお法おをかひけり<sup>キ</sup>聖賢をひかさんと

すろ取より連南はよ百日集勢の志あつて  
日そつとつふ七十五はふなり金ミツネをがま  
とてさるるらりまけいせしやけよる里内家  
奏ソウすしけきとたは法はまの勢ふと益高  
下さるるまとき神人白杖をもつての至ら  
うなりととけく一糸は太路より南へ延  
あしてたり神を物礼をうけぬらすと中  
は太師を地元の大将をいかり中さ連され  
ともや町ら不思議も出来よまうとまこあ  
叙位キヨウイ除目と中を院ぬれ清もくらくらひるを

らに扱ぬ笑白の清せいともいふと及も一  
向平家のみまうてありけきや遠太ち花山  
院もなりぬらす入道お園は婿男小松政  
の向をいささ大御を太大将もてましくけ  
けつたよいうけりて次男宗威中御言まて  
まきしう教察れ上臈をチヨウ新ニウしてたよと  
つと連びらうと中もつとを打ちりし  
かしうと遠太ちぬら一の大御をまて花  
英雄イコウが学ガク雄ユウ長チヤウ家カ婿ケまてま  
亂れ以男宗威つふか階カイあしらわれぬぬら



そを根の深きが建所とて浮出家なとも  
やあつむすんといふさうやあつむすけ  
まとも極大の汝を志しらく世のなさんや  
うをみんとて大おらんを辞してろうさま  
とそまをしし新大御を威親つまひたるを  
徳大寺花山後すいふられうそをりく  
きん平家乃次男宗盛郷を頼られぬらう  
いふむれ次中なれいふえし平家をか  
ろほして平望をとまきびとまひけるうお  
そろいれ父つをあの頼てるヨク中納言

あそいうつうれいその末子うくく  
の正二位右大臣をよめつと大國あまの信  
下子息平盛朝忠にが二通り行の不足るそ  
うん心所つれきんひふそ魔れ取ると  
うんくし平治を色朝後中將とて信頼つ  
小同心れあひひと既もちうまう新人のう  
を小妻汝やうくみりてうひを信ふ給へ  
つと結ぶようれをんをわすれて外人もなさ  
取よ器具をとく乃へ軍兵をひこらひをさ  
給夕をうくつくさい台戦のいながえり外を

又地事をなすとうみしるるにきく東山あづまの  
名とりよ処さう一城しろも三井さんせいもはけりし  
ゆくり一城しろもせうありけりしれは後寛  
徳部乃山やまのりつきよつゆきとて  
平亂へいらんなりはとてふかちるること  
志げ子このあやま法皇も法皇ほつわうならぬ少納言  
入いき信西しんせいの子息こ淨憲じゆんけんは平法皇へいほつわうに  
此こゝに酒さけをよのふを原はら合あはれしとせ  
さやうゆんわのれあさあ一人あふまうけ  
しり佐さぬ只ただとゆれ字なづをてま下くだれ法皇ほつわう大事だいじ小

乃山のやまなんすくやさき進しんを新大御しんたいごを氣多  
のしるるさつやたく進しんのりあまた  
られらとまゐる瓶子びんを猶なほ衣え乃の袖そでのききて到  
たよさ進しんたると法皇ほつわう教しやく授じゆをてわれを  
ののりしと保たもけしと大おほおんたりゆて平氏へいぢ  
よふ進しんゆめとそりさ進しんけりし法皇ほつわうのけりし  
いしをおりましてそのとも兼かねて猿樂さるがけりし  
まは進しんと保たもけし平判へいはん友とも藤ふじのけりしと兼かねて  
何なにこわまりし平氏へいぢの抄しやうがう作しやくよめて之これひ  
てゆや尸しと後寛ごかん徳部とくべありし進しんをいひ

仕つゝと申されし西光法師致をとりよま  
志つゝとて頼子乃らひ頼と申てそのついで  
り多法中阿まるとのあさましきにけやく  
物も申さまじとせもむろろいづりて  
ともなり与力たとてうたまひくそを江  
中入る運治借る成正法勝寺執事後寛保  
部山城守基兼式部左補雅経平判友席頼家  
判友信房新平判友賢ゆり成子も多回花  
人の縁をとりつゝとて水面のものせおが  
うがハカワセ  
与力しつゝとて頼子後寛保部と申て京極

の徳大御言雅後孫のまこと本有法中寛雅  
を子なりきつゝとて祖父大御言をり矢なとる  
もやわつゝゆきもあまらま後わつゝま  
三桑坊門京極れ者所のまをい人もや  
とくとも頼とつゝとて申しおたす  
をろひ志しつゝとて頼とるれとる  
町らおろろつゝとてま人の孫なれともや  
寛も保なれともむもたきおとる人  
てつゝとて頼とるれとる  
新大御言成親孫多田花人め縁をりて

と度汚道をし一方の大將なりたむじなり  
そのこと志切かをけうつ物なりや國をい成  
をも雨望にふりてしまつりあくるれ料  
とて白布又十端をくられらるる安元三年三  
月又日少言院没大政大臣は轉し給るる  
りし王よ小松政源大納言是房のてあてて  
肉大臣左大將にたりてやうて大將にあつた  
ころ大信大將のてたつるに記言老よや大信  
汚門大臣體字乙とそ字しし一上り  
先達なれとも又治の勲左大臣汚物なれ

傳あり水面の上ふまをたくりたるを白河院  
乃汚とふけし地とてのまきよりまよのりく衆  
尋ともあまの山きりる後感<sup>ト</sup>をよこしり  
と大丸予と丸とてあまらうさうなまきり  
そのうてそ有けり馬羽院乃汚時を孝教<sup>ト</sup>  
預父子ともよ御家子なり汚のりてあり  
とりの帯を侍養するあつともありなとてあま  
しつともみふふれほととちもあまふてこ  
うあつらうあのとまきれ水面のともうて  
もつてのほのふとふまてふつ政上人をそ

しつこもきす下如面うり上やぐ絶せり  
あつてまじりやめんらま教上りまうし  
ゆらさしゆく者たほらまきりまわく  
なましく固たふれ子あくろとも色  
志なき孫叛るもくしてたつよ  
りも故少細き入道信あつり  
ひける師光成系とつよもの  
波國を廢成系を京のもの熱根  
たつあんでいまらもろ格勅者  
てもやあつてきんあつて  
てはるもきりつてさくらら師光を左衛

門尉成系を左衛門尉とて二人一  
尉もなりぬ信あつて二人  
ともは出死して左衛門入る  
さあ路とてふれをが死  
清くあつてつてありき  
子も師光とつよのあり  
さら相とて換相遣使不位尉  
割安元とて十二月廿九日  
實当りうなまきりて  
團勢をたふ

法皇礼を<sup>テ</sup>行<sup>ハ</sup>しし神社佛寺控<sup>セ</sup>門勢家乃店  
領をもつたりして<sup>テ</sup>お<sup>シ</sup>代事と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>う<sup>チ</sup>  
つ<sup>ケ</sup>る<sup>タ</sup>と<sup>ハ</sup>ひ<sup>ラ</sup>ふ<sup>コ</sup>の<sup>ウ</sup>ち<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>を<sup>ル</sup>こ<sup>ト</sup>や<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>  
ともを<sup>ん</sup>ひ<sup>ん</sup>れ<sup>改</sup>を<sup>お</sup>こ<sup>な</sup>ふ<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>  
う<sup>く</sup>ひ<sup>れ</sup>ま<sup>く</sup>ふ<sup>も</sup>ら<sup>ま</sup>ふ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>回</sup>二<sup>途</sup>交  
乃<sup>こ</sup>ろ<sup>の</sup>国<sup>司</sup>師<sup>の</sup>言<sup>の</sup>や<sup>う</sup>や<sup>う</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>藤<sup>本</sup>友<sup>師</sup>種<sup>モ</sup>  
を<sup>が</sup>賢<sup>目</sup>代<sup>の</sup>補<sup>き</sup>く<sup>ふ</sup>目<sup>代</sup>下<sup>总</sup>代<sup>も</sup>の<sup>ウ</sup>  
國<sup>府</sup>代<sup>の</sup>橋<sup>河</sup>と<sup>の</sup>山<sup>寺</sup>あり<sup>お</sup>り<sup>や</sup>  
寺<sup>僧</sup>と<sup>も</sup>の<sup>湯</sup>を<sup>ま</sup>の<sup>つ</sup>く<sup>あ</sup>ひ<sup>け</sup>る<sup>を</sup>乱<sup>入</sup>  
志<sup>を</sup>ひ<sup>の</sup>き<sup>ま</sup>る<sup>カ</sup>何<sup>ハ</sup>人<sup>と</sup>も<sup>お</sup>ろ<sup>し</sup>馬

あ<sup>ら</sup>ま<sup>せ</sup>お<sup>と</sup>り<sup>の</sup>寺<sup>僧</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>  
ひ<sup>の</sup>り<sup>の</sup>の<sup>取</sup>を<sup>國</sup>の<sup>も</sup>れ<sup>く</sup>入<sup>部</sup>と  
子<sup>ら</sup>や<sup>な</sup>す<sup>ま</sup>や<sup>の</sup>ふ<sup>え</sup>海<sup>の</sup>ま<sup>り</sup>勢<sup>て</sup>入  
部<sup>代</sup>押<sup>付</sup>を<sup>と</sup>く<sup>災</sup>と<sup>う</sup>の<sup>目</sup>代<sup>た</sup>  
ま<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>さ</sup>れ<sup>く</sup>の<sup>目</sup>代<sup>を</sup>少<sup>く</sup>て<sup>こ</sup>  
そ<sup>の</sup>や<sup>し</sup>ま<sup>れ</sup>れ<sup>南</sup>目<sup>代</sup>を<sup>ま</sup>ん<sup>て</sup>その  
義<sup>の</sup>ふ<sup>ま</sup>た<sup>く</sup>は<sup>ま</sup>ま<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>の<sup>ウ</sup>  
う<sup>う</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>  
の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>  
も<sup>つ</sup>て<sup>乱</sup>入<sup>と</sup>う<sup>ら</sup>あ<sup>ひ</sup>の<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>

ふほくと目代師<sup>モ</sup>の秘<sup>ヒ</sup>花<sup>カ</sup>志<sup>シ</sup>けふ馬のめ  
とらうらちとらうらちの後を序のひより勢<sup>セ</sup>  
無<sup>ム</sup>仗<sup>ヤウ</sup>を帯<sup>オビ</sup>して討<sup>ウチ</sup>合<sup>カ</sup>まらぬの<sup>ノ</sup>別<sup>ワケ</sup>くくふ  
無<sup>ム</sup>舟<sup>フネ</sup>の<sup>ノ</sup>目代<sup>メダイ</sup>の<sup>ノ</sup>船<sup>フネ</sup>も<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>や<sup>ヤ</sup>も<sup>モ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>き<sup>キ</sup>ん  
むふしとそくまのら南<sup>ミナミ</sup>國<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>左<sup>サ</sup>庭<sup>テイ</sup>ホ<sup>ホ</sup>一<sup>イチ</sup>千<sup>セン</sup>館<sup>カン</sup>  
入りあつてつめて揚<sup>ホウ</sup>河<sup>カ</sup>も<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>ら<sup>ラ</sup>を<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>揚<sup>ホウ</sup>舎<sup>シャ</sup>  
一<sup>イチ</sup>千<sup>セン</sup>もの<sup>ノ</sup>こ<sup>コ</sup>ら<sup>ラ</sup>と<sup>ト</sup>皆<sup>ミ</sup>や<sup>ヤ</sup>か<sup>カ</sup>ら<sup>ラ</sup>ふ<sup>フ</sup>揚<sup>ホウ</sup>川<sup>ケン</sup>と<sup>ト</sup>り<sup>リ</sup>ふ  
を<sup>オ</sup>白<sup>ハク</sup>山<sup>サン</sup>の<sup>ノ</sup>末<sup>マツ</sup>ち<sup>チ</sup>な<sup>ナ</sup>り<sup>リ</sup>よ<sup>ヨ</sup>と<sup>ト</sup>海<sup>ウミ</sup>を<sup>シ</sup>んと<sup>ト</sup>す<sup>ス</sup>  
む花<sup>ハナ</sup>僧<sup>ソウ</sup>た<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>さ<sup>サ</sup>く<sup>ク</sup>そ<sup>ソ</sup>智<sup>チ</sup>入<sup>ニ</sup>学<sup>ガク</sup>的<sup>テキ</sup>變<sup>ヘン</sup>者<sup>シャ</sup>坊<sup>ボウ</sup>云<sup>クニ</sup>智<sup>チ</sup>字<sup>ジ</sup>  
當<sup>トク</sup>去<sup>ク</sup>依<sup>ヨ</sup>阿<sup>ア</sup>耨<sup>ニ</sup>槃<sup>ハン</sup>そ<sup>ソ</sup>す<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>み<sup>ミ</sup>け<sup>ケ</sup>ら<sup>ラ</sup>白<sup>ハク</sup>山<sup>サン</sup>三<sup>サン</sup>社<sup>シャ</sup>ハ<sup>ハ</sup>院<sup>エン</sup>

の大<sup>ダイ</sup>庭<sup>テイ</sup>ら<sup>ラ</sup>や<sup>ヤ</sup>く<sup>ク</sup>を<sup>オ</sup>お<sup>オ</sup>ら<sup>ラ</sup>り<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>部<sup>ブ</sup>合<sup>カ</sup>う<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>衆<sup>シュウ</sup>  
二千<sup>ニ</sup>館<sup>カン</sup>人<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>七<sup>シチ</sup>月<sup>ゲツ</sup>九<sup>ク</sup>日<sup>ニチ</sup>れ<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>の<sup>ノ</sup>目<sup>メ</sup>代<sup>ダイ</sup>師<sup>シ</sup>  
經<sup>キヤウ</sup>の<sup>ノ</sup>皴<sup>ソ</sup>ち<sup>チ</sup>う<sup>ウ</sup>う<sup>ウ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>せ<sup>セ</sup>れ<sup>レ</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>シ</sup>目<sup>メ</sup>  
と<sup>ト</sup>連<sup>レン</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>あ<sup>ア</sup>ず<sup>ズ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>く<sup>ク</sup>さ<sup>サ</sup>と<sup>ト</sup>さ<sup>サ</sup>と<sup>ト</sup>つ<sup>ツ</sup>て<sup>テ</sup>日<sup>ニチ</sup>を<sup>シ</sup>よ  
ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ら<sup>ラ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>と<sup>ト</sup>露<sup>ロ</sup>吹<sup>フイ</sup>む<sup>ム</sup>す<sup>ス</sup>ふ<sup>フ</sup>林<sup>リン</sup>風<sup>フウ</sup>あ<sup>ア</sup>い<sup>イ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>を<sup>シ</sup>  
の<sup>ノ</sup>神<sup>カミ</sup>を<sup>シ</sup>む<sup>ム</sup>ら<sup>ラ</sup>う<sup>ウ</sup>へ<sup>ヘ</sup>と<sup>ト</sup>書<sup>カキ</sup>井<sup>イ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>ら<sup>ラ</sup>と<sup>ト</sup>縮<sup>シュク</sup>書<sup>ショ</sup>ら<sup>ラ</sup>甲<sup>ケツ</sup>  
れ<sup>レ</sup>ほ<sup>ホ</sup>く<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>や<sup>ヤ</sup>う<sup>ウ</sup>す<sup>ス</sup>目<sup>メ</sup>代<sup>ダイ</sup>叶<sup>エフ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>や<sup>ヤ</sup>思<sup>オモ</sup>ひ  
らん<sup>ラン</sup>無<sup>ム</sup>の<sup>ノ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>よ<sup>ヨ</sup>と<sup>ト</sup>京<sup>キヤウ</sup>へ<sup>ヘ</sup>の<sup>ノ</sup>か<sup>カ</sup>ふ<sup>フ</sup>あ<sup>ア</sup>く<sup>ク</sup>ふ<sup>フ</sup>あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>  
別<sup>ワケ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>よ<sup>ヨ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>さ<sup>サ</sup>と<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>う<sup>ウ</sup>ほ<sup>ホ</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>け  
子<sup>シ</sup>城<sup>シヤウ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>よ<sup>ヨ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>さ<sup>サ</sup>と<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>う<sup>ウ</sup>ほ<sup>ホ</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>キ</sup>  
子<sup>シ</sup>城<sup>シヤウ</sup>の<sup>ノ</sup>う<sup>ウ</sup>ら<sup>ラ</sup>よ<sup>ヨ</sup>ま<sup>マ</sup>き<sup>キ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ラ</sup>さ<sup>サ</sup>と<sup>ト</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>う<sup>ウ</sup>ほ<sup>ホ</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>け<sup>キ</sup>

きも進しみふらちてゆや中を大鬼らら  
乃して引返りし山口へ指へびして白山  
中一交の神輿張むらをも法經山へより上  
まふ八月十二日の午乃あくる白山の神輿  
こも小以穀山東坂下はけのさをぬふと空を  
しるも水國乃のりりりのけりおひた  
しをがらてまやこ張さしてなり乃ほらと白  
雲降て地をうけこ山上海中をししたくて  
帯盤のやまれ携まてみふ志ろた人よなり  
にたり神輿をも客人の交へのれをら客人

とちり白山少村控現るておろしませす中をこ  
父子の法中一ならは法法の成番を志らす  
生ふれ清らるあひたくは事一よあつ浦嶋  
の子乃七をのまこよあつるる色過胎肉  
れ者の灵山乃交をみしる色あしるる三す  
乃法流るひををけえ七志やれ神人神をけ  
らひ時と刻これ法絶初念言執るひ事  
ともうてそ山まらるるかほしお山口の大前  
國司が交す神言を流花よ取まられ目代を  
藤州友師強を禁樹をらるるへまかろし養字を



といふも汚裁<sup>サキキ</sup>并たくりこれ名残るつゝふ  
 つ教上人をめしきこくし汚裁許あるへ  
 きとのをせしし山門の折昭を地子英  
 なり大慈つる房太宰権<sup>サキ</sup>李仲孫やさうも  
 朝敵の直後多むしうとも山門のうでうみ  
 よつて流<sup>シ</sup>ぬせられ給ふまひしんや師もあ  
 とをことのつすもややあふつみ子細  
 や及ぶとPめられけきとと大居を祿<sup>シ</sup>を  
 にまんしつこつす小居を飛よたうけく  
 中阿とといふ事なまをめくちちをとら

グワニダテ

流<sup>シ</sup>ぬせりも河の氷双<sup>シ</sup>ふのさい山やうし  
 一途そまのむよりふもぬものと白河院も  
 原なりけりとのや島羽院れ汚らさも朝敵  
 代平泉を山門へをせられたの事へ南山  
 を汚<sup>シ</sup>ぬぬあさうさうよらうてなり能<sup>シ</sup>を  
 もつて理ととと蓋<sup>シ</sup>下まきとてしう院意を  
 をくささまされたれも江<sup>カサ</sup>師<sup>ガ</sup>匡<sup>キ</sup>房<sup>フ</sup>れ<sup>レ</sup>つ<sup>ト</sup>の<sup>ナ</sup>  
 さましやうお日吉れ神奥を陣<sup>シ</sup>殿<sup>シ</sup>へあり  
 なたうつたへPさむもをささるつて汚<sup>シ</sup>  
 う〜ひう〜三とやとつてけしよと山門

此新酒をもくししとて作けるを志  
赤保二道義濃も源義経朝臣南園新造の庄  
をたふす間やまの久仁共園庭頭カキ言カキを乞  
まのつて日吉社司延暦寺の古友都台三  
十餘人中久延サチ押下件頭を系しとるを故二  
条の笑白没太和源氏中一務ツボキ控少輔治シ  
作て二道をもあきう務ら行くは損治の席等  
名をとも明法やまをに村ふるは行くものい  
人ききなりうもらその十餘人社司回ある  
皆ミヤおすあまは依て山門の上カキ結カキ赤子細を

そくちんのだらまおひたぐし下洛す  
まらししをカキ換地遠使あるうらむと  
ゆきひのけてうれ返る包す山門まを治裁  
許カキ建カキこのあひし七社乃神興を根本中一雲  
も換あをなりその山あまをカキ換カキの大カキ殿カキあ  
城七日うきて後二條の笑白没をカキ見カキし  
を系カキ結カキ那の導師まを仲カキ濃カキ法カキ東カキうれとさる  
いさ仲カキ濃カキ法カキ東カキとカキしうカキ産カキまのカキ不カキ理カキうカキ  
うらみから一級白のこもいりくまれく  
なるねのよと紫うりわぶとて終一神を

後二条美白汝も<sup>カマラ</sup>福矢ひとけしむらあて給  
へ大い王子控現とたうらみう新撰志  
たるもまきうの敷やうてやふのふやあり  
い王子の法政うら福矢のふおて王城を  
さしてなつてゆらう人のゆめもさんく  
らうけらまめい美美白汝の法格子  
をのまけらに只とやふらうまきて来らう様  
小落すしゆまきうらたまみ一さうたつらう  
らうらうゆしえなれやうら後二条美白  
殿山王れ法とうめとくおもま法病をうけ

さあぬてうらゆとせ給らうや母うへ大敵  
の心政取たまふ法かけさあつて法さゆを  
やたししゆま下賜乃まゆとて目よう  
乃やしうへふらせぬと七日七敷らあひた  
いけりやさあたらうますまらあうつまて  
乃法立歌よまき田樂百番くこれむといゆ  
競馬をゆめとまふをめく百番百座乃  
仁王禱百座乃某師梅一操<sup>キチカ</sup>手半の某師百祈  
等<sup>トウ</sup>がれやう一併なうひり釋迦何孫尼  
の像<sup>カガ</sup>をのしく<sup>サカ</sup>立<sup>リ</sup>供<sup>ケ</sup>貴<sup>キ</sup>をくれたり又法心

中一に三の侍を召あつて侍あくるる乃うらの  
侍とかなれも人のつてくしうを新へきそ  
まよなふうりも又不思儀なりけりこころ  
そ七日小満する敷ハ王子は侍やしるよ  
くくそありきりきり人ともれ中ハ陰奥國  
らうらうらくしとれほりらうらうらうら  
こやらんらんうらうら入るきりらうら  
り式出してつれつれけきあやうくたちて  
のり人新持れ智心なうてあれをみる  
半町らうのうらまひてのら山並わりのうら

格々の侍を召あつて侍あくるる乃うらの  
しう小承もれ大敷れ水取ふ七日うら  
侍あよあゆらうを終らう侍を召あつて  
しうを召あつて下乃壽命をたをけさせお  
まうあさもさふらうく大敷れ下取おゆら  
るらうくこれゆらう人よあうらうて一  
のあひこ物タラや侍のひりさうとなり  
波の水取らうてを召あつておほく  
さうあゆらう侍あよ子をたのみらうら  
ひめまうしうあやもわすらうあ



此<sup>言</sup>は清もさへよふらうらなりまことう  
本<sup>言</sup>を<sup>言</sup>通をみふとしてめい<sup>言</sup>の<sup>言</sup>子を見  
ねも左<sup>言</sup>れつれさ<sup>言</sup>ちさならわ<sup>言</sup>けの  
うちほ<sup>言</sup>うけの<sup>言</sup>りくそ<sup>言</sup>みく<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>る<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>  
かあ<sup>言</sup>る<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>ん<sup>言</sup>う<sup>言</sup>き<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>や<sup>言</sup>り<sup>言</sup>の<sup>言</sup>中<sup>言</sup>と<sup>言</sup>色<sup>言</sup>如<sup>言</sup>終  
を<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>は<sup>言</sup>は<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>ん<sup>言</sup>た<sup>言</sup>う<sup>言</sup>う<sup>言</sup>一<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>る  
る<sup>言</sup>く<sup>言</sup>や<sup>言</sup>三<sup>言</sup>邊<sup>言</sup>の<sup>言</sup>命<sup>言</sup>を<sup>言</sup>の<sup>言</sup>く<sup>言</sup>な<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>び<sup>言</sup>う<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>終<sup>言</sup>不  
足<sup>言</sup>に<sup>言</sup>ほ<sup>言</sup>の<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>も<sup>言</sup>ち<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>及<sup>言</sup>す<sup>言</sup>と<sup>言</sup>て<sup>言</sup>山<sup>言</sup>王  
あ<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>後<sup>言</sup>終<sup>言</sup>々<sup>言</sup>り<sup>言</sup>母<sup>言</sup>う<sup>言</sup>人<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>の<sup>言</sup>清<sup>言</sup>を<sup>言</sup>此<sup>言</sup>清<sup>言</sup>奉  
人<sup>言</sup>の<sup>言</sup>も<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>う<sup>言</sup>を<sup>言</sup>終<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>ね<sup>言</sup>も<sup>言</sup>た<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>む<sup>言</sup>

じ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>う<sup>言</sup>こ<sup>言</sup>う<sup>言</sup>の<sup>言</sup>み<sup>言</sup>も<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>い<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>  
清<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>る<sup>言</sup>の<sup>言</sup>中<sup>言</sup>に<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>し<sup>言</sup>も<sup>言</sup>を<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>り<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>く  
小<sup>言</sup>清<sup>言</sup>魂<sup>言</sup>盡<sup>言</sup>あり<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>や<sup>言</sup>り<sup>言</sup>く<sup>言</sup>心<sup>言</sup>肝<sup>言</sup>よ<sup>言</sup>ふ  
て<sup>言</sup>う<sup>言</sup>や<sup>言</sup>母<sup>言</sup>の<sup>言</sup>と<sup>言</sup>く<sup>言</sup>切<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>た<sup>言</sup>と<sup>言</sup>ひ<sup>言</sup>一<sup>言</sup>日  
河<sup>言</sup>時<sup>言</sup>て<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>よ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>も<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>り<sup>言</sup>の<sup>言</sup>う<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>ふ  
つ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>る<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>う<sup>言</sup>て<sup>言</sup>三<sup>言</sup>邊<sup>言</sup>の<sup>言</sup>い<sup>言</sup>り<sup>言</sup>を<sup>言</sup>の<sup>言</sup>く<sup>言</sup>ぬ  
り<sup>言</sup>し<sup>言</sup>じ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>仰<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>く<sup>言</sup>う<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>  
と<sup>言</sup>し<sup>言</sup>仰<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>て<sup>言</sup>清<sup>言</sup>た<sup>言</sup>み<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>を<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>る<sup>言</sup>て<sup>言</sup>山<sup>言</sup>下  
向<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>う<sup>言</sup>その<sup>言</sup>後<sup>言</sup>紀<sup>言</sup>伊<sup>言</sup>國<sup>言</sup>は<sup>言</sup>没<sup>言</sup>下<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>終<sup>言</sup>田<sup>言</sup>中  
老<sup>言</sup>と<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>延<sup>言</sup>を<sup>言</sup>永<sup>言</sup>代<sup>言</sup>い<sup>言</sup>る<sup>言</sup>子<sup>言</sup>へ<sup>言</sup>寄<sup>言</sup>巻<sup>言</sup>を<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>る<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>

まじつ戸乃をよつてかまては花問答毎  
日返轉なりとそうけた下もるのくつりか  
とに後二条の笑白没汚痛のるまき燈のひて  
りてれこととたなうきぬふ上下らるあひ  
めもけりやとよ三途のまくかをゆめなれ  
や永長二途よなりよきると六月廿一日又極  
二條笑白没汚痛のまきとよめりまき汚りまき出  
させ給くうりぬまき燈のり回廿六日汚り  
三十一日てはぬまきくまきとせ給ぬ汚り  
たきと理りけよあきとゆくとたせ志

つゆもまめやうふ事の急うまなりぬまき  
汚りまきとよめりまきとよめりまきとよ  
る一四十一よとにみくを給とて大敵よと  
たきとぬふとらうりまきとよめりまきと  
さげたつるとりよ事いおけまきとも生死  
のをまきとてに志とらふなうひ美徳園満のま  
きと地窟<sup>キヤウ</sup>のまきとらふらうらうとせ汚り  
ぬまきとらふ<sup>ゴ</sup>熱<sup>ニ</sup>具<sup>ニ</sup>足<sup>ニ</sup>の山王村<sup>ニ</sup>相<sup>ニ</sup>の本<sup>ニ</sup>授<sup>ニ</sup>ま  
てまきとらふまきとらふのまきとらふ  
かまきとらふまきとらふ山王村<sup>ニ</sup>相<sup>ニ</sup>の本<sup>ニ</sup>授<sup>ニ</sup>ま

三三三

まを海冠小取きしれ押さうやと藤判友師  
陸を禁獄きく新へきうーそくらん度こに  
及といるとも修裁許なりけ連て日吉の祭  
礼なうらとくめ安元三年閏月十三日乃唐  
の一とんに十禱師各人ハ王子三社の神輿  
をむらりきて件取へしやりをふらぐり松きれ  
境安元川原河合梅たぐ柳原菜小佐きり  
志く大庭神人<sup>三</sup>名<sup>三</sup>位<sup>三</sup>者<sup>三</sup>み<sup>三</sup>ら<sup>三</sup>く<sup>三</sup>て<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>く<sup>三</sup>  
とつふの<sup>二</sup>す<sup>一</sup>を<sup>三</sup>志<sup>三</sup>く<sup>三</sup>と<sup>三</sup>神輿<sup>一</sup>を<sup>三</sup>一<sup>二</sup>条<sup>一</sup>を<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>へ<sup>三</sup>い<sup>三</sup>  
ら<sup>三</sup>を<sup>三</sup>給<sup>三</sup>へ<sup>三</sup>を<sup>三</sup>清<sup>三</sup>神<sup>三</sup>室<sup>三</sup>と<sup>三</sup>よ<sup>三</sup>う<sup>三</sup>や<sup>三</sup>ふ<sup>三</sup>日<sup>三</sup>月<sup>三</sup>地<sup>三</sup>よ

ばら給ふくもむむやうありうあれ小よつて徳  
平あぬれ大の軍よ作て四方に件取を叩く  
つて大庭少き見ふかすく作くさう平あ  
るを小松由大居左大将を感ふそのせい三  
十餘騎よて大まねをて大陽の待覚部<sup>ユウケ</sup>若門<sup>ニガド</sup>  
三の門を叩く也終中家感氣感直<sup>ヒラ</sup>伯父<sup>チチ</sup>損  
感<sup>カ</sup>教<sup>ケ</sup>感<sup>カ</sup>強<sup>キヤウ</sup>感<sup>カ</sup>な<sup>ニ</sup>と<sup>ト</sup>を<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>ぬ<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>件<sup>三</sup>を<sup>三</sup>か<sup>三</sup>た<sup>三</sup>り<sup>三</sup>ぬ<sup>三</sup>  
源氏よを大由<sup>オホユ</sup>を<sup>三</sup>護<sup>三</sup>の<sup>三</sup>源<sup>三</sup>三<sup>三</sup>位<sup>三</sup>教<sup>三</sup>政<sup>三</sup>清<sup>三</sup>遠<sup>三</sup>乃<sup>三</sup>菴<sup>三</sup>  
授<sup>サツ</sup>を<sup>三</sup>あ<sup>三</sup>ま<sup>三</sup>り<sup>三</sup>て<sup>三</sup>う<sup>三</sup>れ<sup>三</sup>せ<sup>三</sup>い<sup>三</sup>終<sup>三</sup>よ<sup>三</sup>三<sup>三</sup>百<sup>三</sup>餘<sup>三</sup>騎<sup>三</sup>小  
代<sup>サヤ</sup>門<sup>カド</sup>ぬ<sup>ス</sup>い<sup>ニ</sup>波<sup>ナミ</sup>の<sup>三</sup>ち<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>を<sup>三</sup>叩<sup>三</sup>く<sup>三</sup>の<sup>三</sup>ぬ<sup>三</sup>取<sup>三</sup>を<sup>三</sup>ひ<sup>三</sup>ろ<sup>三</sup>







後を清院清任位の清と云南産の清書への  
ついでに深山の花といふ題をかき進んでつけ  
かをんをみかふらまじりらひぬまうにらの  
損改つ

深山本のうれあきとともみくさうし

さくくあまぬすあつれすくを

とつふるあはて清感よあつりるあとのや  
あやとふよとさよのうんてなまあなうい  
りく死奪をいめたふつあは神らと神輿か  
まうりてままやせんさうけきと教

予人の大命を神らとほほまてうれむこと  
そ甲けつとて神輿をとりまのるなり  
本の内頭待覚門より入まらんとけり  
頼藉たちまらよかまをあまともあまの村  
まふ十神師の清うりて矢を何まこの  
てまう神人まは射るまは清かかあ  
せりうよりおのあまをふく急禁まても  
まこまをんらう地神をたてろくじとそ  
まほくたる大命神輿を神らよりまて  
まりなくく本山つうりるまのつるま

接ふる小及て荒人左お并通光小保て院此  
汲上りて接ふ心つ念儀ありたりを保安  
ま四月の神輿入洛の時を座主の保て赤山  
乃社への道なり又保造四月七月の神輿  
入洛の時を祇園社別當の保てまをん乃  
やしろへのれをく子と度を保造の保て  
了しとてまおんれ別當大僧部院テウケシの保  
るい志よるに及てまをむれやしろへ入を  
らる志んよまたつ保れをを神人してぬ  
が勢らるをくしより山門の志の志んよ

を少りなること承久より至あの明く治承下  
てを六ヶ度なりと進とと毎度よ我土小保  
てあをり接られくは神輿射をふあやあれ  
とくわやううけ接らるる神輿いりまををさ  
災言らまるとはつといつとむらうく  
とうとめく意ひあもれらる同十廿日教中  
とらる山門の志又あひたくしう下洛と  
とまをししをま上を中一の神輿よめ  
て院接取法恒寺汲へ初寺なり中ままやみ  
やを接らるまをを地取へめ接ありけ

里小松乃折くを垂衣も矢をふて供養を  
らる婦子控亮少将維盛を末弟もひくやお  
くひ負てそまのりきけり笑白飯をもうめ  
をへ太政大臣に下れつお書者ゆきこく  
と供養まきく子丸幕布のを被京中れ上下さ  
く記せく志ることおひこくしきねも山  
門もを神輿小矢たち神人ま仕討らるきき  
最法おがをききとを最たりし大文二文  
己下海雲中書とて志よこう一きものこ  
所とみふやふ拂て山野小まうらるへふかゆ

三千一回も念後すきも後て大敵の中法  
皇清らうのらひもやしと中をくくを山門乃  
上総ふる細を最法小まんとて登山すと  
雪くくうも大志ゆ西坂なるおり下て管長  
也す平太細き内忠つを町やゆる左衛門管  
もておらうらう上師もく大護雲の道も  
三塔書合して上つを取てひけもりしや冠  
をおねとくま者を搦で水海もくかえよか  
とそ中巻ら既のうとみこく時町忠つ大忠  
れ中へ使者をきて皆とつまられく最法

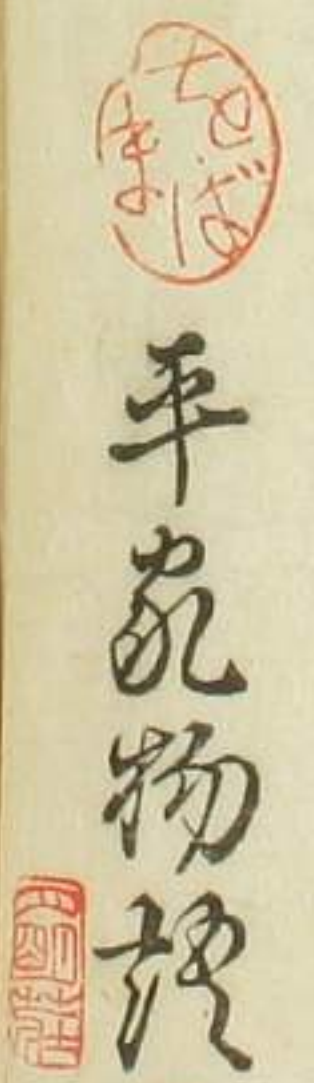
の市中へ中へ事ゆき事ゆきと懐く事しす  
り墨紙を出一筆出て大志色の中へ送  
らるるを罪てくるる志ゆとの遊魚をい  
とや魔海の所行方明王の割山紙をい  
ふを善遊れか護方とてうつくまふは  
をみく大志ゆひけとふま及んと皆むこと  
同て若くつる入まらる一紙一白をもつ  
て三塔三子の誓をやとめふ松の死をい  
ぬひん河忠郷よりゆくとけふ山門に大  
志ゆや舞向のそらりりりきりりりりり

のあはれをいりりをも存知志けりりり  
感しあつたけりり同女目花山院控中  
忠親つをよつて國司が實事師言を  
あつてる経の井戸田へたつたつ中  
判友師言をい禁樹をらる又十三日神興  
村有る一歳と人獄をらるあつたつ  
小松波代侍なり同日女目花山院控中  
ひくら富少路より大が来て京中一  
やあまらりあつたつこの風吹たれを  
車輪れことなるがけりりり三町子町を福

ていねい此中へをちりへみおろしとて焼  
ゆきしむるろくなく色魚なり或る具平親  
王の子孫取或る聖天祿の御孫取掃邊勢の  
ちの松殿畠波も雲波鴨居教東三宗を嗣大  
臣乃深院殿昭憲公の孫川とのこを始て  
ひろくこれ名取母館を承ふり家たしと  
十六ヶ年まて焼もきりその外波上人祿大  
丈乃苑とを志るす丹及びすもてと大内小  
あふ所もて柴藪門より始て森田門書昌門  
大極波を樂院法月ハ首領承一時のうらに

皆歴代此地とう成ふりか苑くの日記代と  
此又書七珍美寶に終りちりといとかなぬ  
を聞れいし魚のちりとう人乃焼苑ゆる  
言一教百人半馬れとての教頭志すあれ  
たくとりあつて山王の清とらめとては  
穀山より大なる積ともあり二三予ちつと下り  
多しと松火跡ともひく京中を焼とる人の  
夏子そみくちらまけが太極波を清和天皇れ  
清亨天皇十八年又始て焼とらまけを同十  
九年正月三日陽成院乃清承位を樂院より

てそまきりる元慶元年三月九日ことごとくしめ  
るそと二月十日い日そまかさ進たるしけり  
故に泉院乃清うそ嘉立二年二月廿六日又や  
けりそり治暦元年八月十四日小市始あり  
しりともひまの化にも出さ進とて後冷  
泉院乃清なりぬ恒三条院のさよう延久中  
直四月十日又日すしけりし出さ進そ文人詩  
となり治人樂と奏して遷幸なりそふとを  
世末に成て国の力と義<sup>オト</sup>なること進そそのちを  
はぬるはくられと



平泉物語百才一

*[Faint, mostly illegible handwritten text on the left page, possibly bleed-through or light ink.]*



